

ルネサンス世界 —その意義と我々—

根占 献一

はじめに

ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所の発足に当たり、この講演の機会を考慮くださった早稲田大学文学学術院の諸先生と地中海研究所所長の宮城徳也先生に、そしてとりわけいろいろとお世話になっている甚野尚志先生には心より感謝を申し上げます。つい最近、同研究所の客員研究員としての嘱任通知書が送られてきて、新研究所が身近な感じになったところです。

私の勤務している学習院女子大学のキャンパスはこの場所に非常に近く、大学、大学院と学んだ戸山地区と縁が続いているとつくづく思っています。一時期を除けば、優に30年以上をこの地に通り詰めていることとなります。この時間がたいへんな長さであることは、先月（2009年10月）の早大史学会で実感しました。評議員会で日本中世史の知人と再会したのですが、私には彼が誰かさっぱり分からず、時の流れを痛感したものです。相手が先に気づいてくれたとしても、私のほうもかなりメタモルフォーゼ（変容）していたことに間違いありません。

（一）未知なる文化との出会い

その間に流れた年月の間に、どれだけルネサンスの時代が分かったか、そして私の研究法が歴史的には客観的なものなのかどうか心もとない限りですが、多分日本の学会動向に余り関係なしに、好きなところ、関心のあるところを継続的にやってきたことは確かだろうと思います。私のテーマ上の主要関心事との出会いはこんな感じになるでしょう。高校時代に受験勉強についていけなかった私には、早稲田での大学生活はぴったりと合っていました。東京大学を卒業していた従姉妹に学部一年目の科目登録の際には随分と手を煩わせました。70年安保を控えた時代、彼女には大学の授業に幻想を持ってはいけないと言われたのですが、生意気で世間知らずだった私は、芥川龍之介ばりに、イリュージョンのない者にはディスイリュージョンはないと答えました。入って2年間ほどは学園ストが多く授業らしい授業がなく、好きなことができるのはとても有り難く、また受験生時代に親にはたいへんな気苦労を掛けたのですが、どういうわけか授業料免除の大隈奨学金を貰い続けることができ、この面ではいくらか親孝行をしたかなと思います。

東京は九州時代と異なり、美術館も古書店も多くて知的刺激に富み、勉強するにはもってこいの場所でした。もともと写真や美術のような視覚芸術が好きで、中・高校生の頃から、写真家ウィン・パロックや画家ペーテル・パウル・ルーベンスには魅惑されました。書物も挿絵の多いものに眼がなかったのですが、卒論を前にして高階秀爾著『ルネッサンスの光と闇——芸術と精神

風土』という本と出会い、初めてここで本格的にプラトニズムとフィチーノを知ることになりました。難解なエドガー・ヴィントを読んだのも、高階著に教えられたからです。そして、これと併行して、パノフスキーの『イコノロジー研究——ルネサンス美術における人文主義の諸テーマ』も読みました。ともに古書店で入手したのですが、パノフスキーは高階とともに1971年の発行です。こんな難しい本をよく翻訳する人たち（訳者の多くが早大大学院文学研究科出身の方たちでした）がいるものだなと、研究者のあり方を示されました。

こうして、ルネサンス・プラトニズムという文化形態を知ったことは間違いありません。十分とは言えない理解でしてはと思いますが、それは極めて神秘主義的な神学に映じましたし、それが魅力的であったのでしょう。そのような文化がイタリア・ルネサンスにあるとは知らなかったことでした。

しかし、知識や文化の受容は決して一方的ではないはずです。私の側にもこのようなものを求める知的傾向があったのでしょう。学部生の時住んでいた、駒場のザビエル学生寮にはちょっとした図書室があり、カトリック神学が初めて眼前に現われていました。岩下壯一とか吉満義彦とか言った人たちの名を初めて知りました。他方で、中世の作者不詳『不可知の雲』(*The Clowde of Vnknowyng*, 奥田平八郎訳、現代思潮社、1969年)という翻訳書もあり、題からして印象的で、それまで知らなかった中世ヨーロッパの未知の領域を教えてくれたのです。またこの寮生と素晴らしい出会いがあったことはいうまでもありません。ここで仲間や友の有り難さを噛み締めることができました。

(二) 鈴木成高先生とルネサンス

学部、大学院時代の授業で面白かったのは、鈴木成高先生でした。必ずしも鈴木先生のご著書自体から影響を受けたというわけではなく、正に警咳に接するというのはこのことだろうと思います。先生のお話に影響されたのです。また、もちろん先生が授業や話のなかで挙げられる方々の著書を方端から読んだわけではなく、限られていましたが、その中ではたとえばクリストファー・ドーソンの翻訳書とか原勝郎の『東山時代に於ける一縉紳の生活』とかは興味深く読みました。基本的には中世史家として先生はカトリシズムに強い関心をもっておられたので、ドーソンも出てきたのでしょう。先述のように、学部生の頃、カトリック寮にいたためにカトリック思想にはそれなりの関心を持っていました。ドーソンと先生を介して、Christendom、キリスト教世界という概念を頻りに考えることとなりました。また原の著作は私に一族を深く考えさせる機会を与えただけでなく、彼の別の著書『日本中世史』とともに、西洋史に通じた日本の先人達が日本列島の歴史をどのように見ているかを教えてくれました。(このことは朝河貫一博士の諸書にも言えることですが、こちらは鈴木先生を介してではありません。)

鈴木先生はまた、ルネサンスへの関心も相当おありでした。そういう中で、先生は実に明快な時代像のシェーマが上手だったと感心します。たとえば、中世はプラトンではなくてプラトニズムの歴史だと言われるのです。さらに、中世はルネサンスの繰り返しとか、ルネサンスが続く限

り中世は終わらないと言われたのです。このような表現は、ホイジンガ（「歴史的生活理想について」）にも見出せますし、先のプラトン不在の歴史も反論は可能でしょう。フィチーノの細密な伝記を物したレーモン・マルセルは「プラトンの不在と回帰」の如何でそれがルネサンスであるか否かを判断していますが、「プラトニズム」とは言っていません。出典や正確さはともあれ、強く印象に残ったことは確かで、それが警咳に接するということでありましょう。

ただあの時は気づかなかったのですが、鈴木先生のルネサンス観は世俗主義へ向う促進力となった運動というような教科書的、一般的見方ではなく、かなり文化的、人文学的な関心でありましたし、このルネサンス観が根本にあるのは正統でありましょう。それ故、先生の授業にはレトリックやレターズ (letters) という言葉が頻出しました。これらがなかなか理解できず、何とか分かってしましました。日本語でこれを「修辞学」や「手紙 (書簡)」と簡単に置き換えられる点が理解を妨げてはいないでしょうか。創文社から出した二冊 (『フィレンツェ共和国のヒューマニスト』『共和国のプラトン世界』) の本はそれに対する回答を含むと思いますし、イタリア・ルネサンスの始まりをダンテからでなく、ペトラルカからする意義もやはり理屈が通っているのではないのでしょうか。ペトラルカによる、キケロのアッティクス宛書簡集の発見は歴史的にはやはり大きな出来事でありましょう。

中世の数々のルネサンスを人文的視点から見ておられたので、鈴木先生には、日本の西洋中世史家のようなロマネスク芸術を持ち上げる一方で、ルネサンス芸術を否定するような chauvinistic な態度はなかったように思われます。むしろ中世芸術に関してはゴシック芸術に関心が強かったかもしれません。ダゴベルト・フライの記憶は曖昧ですが、ヴィルヘルム・ヴォリンガーの名はよく出てきました。またヘンリ・トーデも教えられました。これらドイツ語圏の美術史家はイタリア・ルネサンスとの関係性を問題にしており、勉強になりました。ルネサンスの繰り返しという言い回しで、先生は中世史の連続性を考えておられたので、カロリング・ルネサンス、12世紀ルネサンス、イタリア・ルネサンスのそれぞれの特徴を挙げて、互いに無関係なルネサンスとする見方 (科学史家伊東俊太郎) とは、明らかに異なっていました。12世紀ルネサンスを持ち上げる研究者の中には、その後から現代までを一貫して発展した期間と見なすことで、イタリア・ルネサンスを矮小化するか、無視するかの態度を取りました。

他方で、イタリア・ルネサンスはなにも中世の側からその内容と意義を問題にされただけではありません。(ヴィンケルマン流の) 美術史上の古典様式をもってルネサンス美術の極地とすることに異論はありませんが、その直前までのゴシック様式の揺曳と、その直後のマニエリスム様式の出現とを境界とし、時代としてのイタリア・ルネサンスをまったくの短期間に限定しようとする傾向があります。この様式中心の観点が時々強力になり、その盛時は16世紀最初の10数年に限定され、不安や苦悩はまさにマニエリスムに特有のイデオムになりました。古典様式からの時代把握には、様式の段階的発展という観点、あるいは様式の多様性による時代の豊饒性という柔軟な見方が望まれます (文学史家ワイリー・サイファー)。様式は常に時代のなかにありますが、時代は唯一つの様式を取るとは限らないでしょう。もしそうであれば、アルカイック期と古典期、

ロマネスクとゴシックという様式区分は、各々ギリシア史と中世史に対し、如何なる意義や関係を有するのでしょうか。

私はこれまで時代概念としてのイタリア・ルネサンスは、決して後世の研究者が拵えた時代ではなく、当時の人々が抱いていた、前の時代とはまったく違っているという明確な時代意識の産物であることを強調してきました。また中世期に一千年を与えて——与えたのは、イタリア・ルネサンスの人文学者、ヒューマニスト、フラヴィオ・ビオンドでしたが——その変化を強調しつつ、ルネサンスには高々数十年を一つの様式のもとに与えて変化なしとするのは、まったくの不公平ではないでしょうか。

(三) 村岡哲先生と学問的教養

私なりのイタリア・ルネサンス観を示すことで、このルネサンスの独自性を明らかにし、この講演の題目「ルネサンス世界—その意義と我々—」と関連付けて見たいのですが、その前に鈴木先生とともに忘れることのできない恩師について語ることを許してください。それは村岡哲先生です。先生はドイツ近代史がご専門で私との接点は乏しかったのですが、教養という、もっと普遍的な面では交わりがあったように思われます。先生の文豪ゲーテへの思いや哲学者カール・レーヴィットとの出会いは実に興味津々たるものがありました。私の高校時代の世界史の教師が長身白皙の美丈夫で、その横顔はフリードリヒ大王のように映じていたのですが、先生の御宅にあった大王のデスマスク（レーヴィットからの贈り物と伺った記憶があります）を見るたびに、この教師を思い出したものでした。

村岡先生は日本におけるルネサンス文化史研究の草分け、大類伸先生の講筵に列していたので、レオナルド・ブルーニを調べたことがあると言われたことがありました。今日、ブルーニは市民的人文主義者として注目されている一人です。また、ゼミでの発表の折に、私にプラトンを何で読んでいるのかと尋ねられたことがありました。先生の御宅にはご尊父村岡典嗣博士の蔵書として、Jowett のプラトン訳がありました。この英訳プラトンはあまりにも有名です。『プラトニズム古今』(Platonism Ancient and Modern, Berkeley, 1938) の名著で知られるポール・ショーリイは次のように、フィチーノの仕事との関連で言っています。「各対話篇に序文的試論のついたプラトンのラテン全訳は、1482 (ママ) 年に現われ、その出版はヨーロッパ文学史における大いなる出来事の一つとなった。3 世紀に亘って読み継がれたが、このことはジャウエットのプラトンが過去 40 年間の英米に対してそうであったのと同じである (p.121)。」

先生の仙台時代の関係で河野與一やケーベルなどは楽しく読みました。河野の随想「源流に遡る——プラトニック・ラヴ考」(『學問の曲り角』岩波書店、1984 [1958] 年、15-34 頁。初出は『大阪朝日新聞』昭和 4 年 [1929] 年 1 月) には、この「プラトンの愛」の造語者フィチーノの名が出てきます。また久保勉 (まさる) によるケーベル博士の随想集か何かをお借りしたことがありました。その中に、友情熱中者 *Freundschaftsenthusiast* というドイツ語表現を見出し、これはフィチーノに相応しい言葉と思い、生まれて初めて原稿料をもらったある論考では使わせても

らいました。

尚、私はこの成句、「プラトンの愛」を誰が日本で最初に用いたか関心があり、古文献を読む際に随分注意しましたが、奇妙なことに、しかも奇妙な文脈で、駐独公使青木周蔵がビスマルクに対してこの言葉を使っていることを知りました。日独の関係がこれまでは学問上の関係に中心があり、物質上の関係が乏しかったことを遺憾に思うとして、「相互の関係は恰も『プラトニック・ロヴ』に似たり。故に余は将来此の『ロヴ』をして実質的な『ロヴ』たらしめんことを希ふ」と。両国間の貿易が拡大されることで、精神的な関係たる「プラトニック・ラヴ」を変えようと望んだことが分かります。

ところで、話の前後関係は記憶にないのですが、村岡先生が大類先生は晩年キリシタン研究に向われたことはお聞きしましたし、ご尊父の蔵書が天理大学図書館にあることを話されたことがあります。先生からこういうお話を伺ったとき、私自身がキリシタン史にさほどの関心があったとは思えないのですが、何か気になったことは事実です。その後、私は典嗣博士がキリシタン文学の研究でも大いなる貢献をされたことを知りましたし、学士院関連の誌上に書かれた、大類博士の論考も読むことができました。

実は、私独自のルネサンス観と言ったのは、所謂このキリシタン史と結びついています。最初の頃はこんなことになるとは思っていませんでしたが、キリシタン関係の史料や文献を読むにつれ、これはイタリア・ルネサンスの問題だと思われ始めたのです。その視点から、私は『東西ルネサンスの邂逅——南蛮と禰寝氏の歴史的世界を求めて』という小著を出しました。つまり数あるルネサンスの中で、私たちと結びつく唯一のルネサンスはイタリア・ルネサンスの歴史的世界だと感じられ出したのです。人文学的伝統もそもそも私たちの言語とは何の共通性もない、ギリシア・ラテン世界の言語であり、その点ではカロリングも12世紀も、またイタリア・ルネサンスも同根です。でも、最後のルネサンスには日本と関わる同時代的世界性があるのです。遠い時代の、結局は無縁の歴史的現象と思われたものがまったく近いものとして、熱い関心を持って眺められるようになったのです。

(四) ヨーロッパ思想と近世日本——第一資料をめぐって

ルイス・フロイスの『日本史』（『完訳フロイス日本史6 大友宗麟篇I』松田毅一・川崎桃太訳、中公文庫、2000年）に次のような表現があります。「・・・（仏僧の）一人は司祭（メストレ・フランシスコ・ザビエル）に対し、汝が拝んでいる神（デウス）には形態、もしくは色彩があるかどうかと質問した。司祭はこれに答え、デウスにはなんらの形も色もなく、またいかなる偶有的属性もない。なぜならばデウスはあらゆる元素から離れた純粹の実体である。いな、それらの創造者であるからだ、と言った。仏僧たちはさらに、そのデウスはどこに起原を有するかと質問した。司祭は答え、デウスは自ら存在する、デウスは万物の原理であり、全能、全知、全善で、初めも終りもないからだ、と言った。」（52頁）フロイスは、仏僧たちの宗派が真言宗と言われて、大日と称する本尊（プリンシピオ）を礼拝するとし、この大日如来に、神的性質に特有な多くの

尊称や属性を付与していると書いています。「この宗派について知り得たところによれば、彼らの大日なるものは、我ら（ヨーロッパ）の哲学者たちの許で第一質料（マテリア・プリマ）と称するものと同じものである。だが仏僧たちは大日を最高で無限なる神であると称し」た。「それゆえ仏僧らは我らの説くところを聞くと、デウスの属性が彼らの大日に非常に類似しているように思われ、彼らは司祭に対し、言葉の上では、言語や習慣において、互いに異なっているものの、伴天連が認める教義の内容と自分たちのそれは一つであり、同じものだ、と語った」（52-53頁）というのです。

このような論争に現れる用語の数々はスコラ学を知っている中世の研究者には分かりやすいところでしょうし、ジョヴァンニ・ピーコ・デッラ・ミランドラの意を汲むルネサンスの研究者ならば、後述するジョアン・フェルナンデス修道士でなく、この哲学者のような人がザビエルの傍らにいたら、話は違ったのではと思われるでしょう。なぜなら、ピーコなら、言語は違っても、同一の真理を表しうると考えたからです。1485年、ヴェネツィアを代表するヒューマニスト、エルモラオ・バルバロに対し、ピーコは言います。「同一の事柄をアラブ人はそう言い、エジプト人もそう言うだろう。彼らはラテン語でそのことを言わないだろうが、それでも正確に言っている。」

数日経って、ザビエルは仏僧たちの調子をおかしく思い、大日自体について詳しく検討し、今度は次のように質問したというのです。「彼は自らの乏しい日本語の知識を傾けて仏僧たちと語った際、彼らに向かい、至聖なる三位一体の第二のペルソナが肉体を持ち、人となり、人類を救済するために十字架上で死に給うたことを信じたり、説いたりするかどうか」と（53頁）。これに対し、仏僧たちがザビエルの期待通りの返事をしなかったのはもちろんです。この結果、ザビエルは彼らの宗派が他の日本の宗派と同様、悪魔が考案したものだと言教するように、フェルナンデス修道士には命令したというのです。修道士はこの命令に従いました。

私はこの東西の出会いの中で、特に「第一質料（マテリア・プリマ）」という術語が使われていることに興味を持ちます。フロイス自身はスコラ学の牙城、パリ大学部神学部で学んではいませんが、イエズス会のなかでスコラ語法を身につける教育を受けました。ザビエルはまさに同大学の出身者で、たいへんルネサンス時代の知識人でした。日本に来るに当たり、日本の大学人と議論（disputatio）したいと張り切っていました。フロイスは山口で行なわれた、キリスト教徒と仏教徒のこの論争の現場にいたわけではありませんが、その用語「第一質料（マテリア・プリマ）」をザビエルの口の端に上らせるのは、フロイスの教育的背景のみならず、ザビエルの大学教育を考えると至って自然です。

この用語をザビエルに押し付けるのは不自然でフロイスの作為の跡が見えると主張された、日本の研究者がいます。それはたいへん実証的で敬意に値するお仕事ですが、私には作為的とは思われません。先ずこのような対話的論争において、登場人物の役割に合った発言が行なわれることは、レトリック上、何の問題もありませんし、第一、「第一質料（マテリア・プリマ）」なる概念がザビエル死後の造語ではありません。ザビエルのような経歴の宣教師にとり、この用語は自

家業籠中のものであったでしょう。仏教をザビエルは十分に理解しておらず、フロイスに至って次第々々に明らかなった点を、早くもザビエルが把握しえていたかのように、フロイスは記述していると主張されたいのですが、ザビエルの2年余りの日本での言動を見ていると、無理解とはとても思われません。寧ろ、明瞭なのは、いくら高学歴な知識人であっても、ヨーロッパ的価値観でアジアの宗教を見ているという厳然たる事実です。

さらにこの用語の問題は、ルネサンス時代のヨーロッパ思想を知る者には興味深い視点を示してくれます。ザビエルがパリで学んでいた頃に、フランスを代表するヒューマニストが活躍中でした。ジャック・ルフェーヴル・デターブルです。彼は神学博士の学位を取っていなかったし、ソルボンヌの教師でもありませんでした。専門神学者たちからはこのために盛んに批判され、非難を浴びましたが、フランスの福音主義を代表する一人となり、いわばこの地でデシデリウス・エラスムスの役割を果たしました。1512年の聖パウロ書簡注釈は恩寵と信仰の主題をめぐるルター思想の発展に影響を与えました。1522年には福音書注釈、翌年には新約聖書のフランス語訳、同じく詩篇のフランス語訳を世に出しました。

エラスムスもイタリア人文主義やプラトニズムから無視できぬ影響を受けましたが、ルフェーヴル・デターブルは明らかにこのオランダ人よりも、フィチーノやピーコからルネサンス・プラトン主義の特徴を成す、シンクレティズムの影響をより強く受けました。また、ルフェーヴルとイタリア人文主義の関係では、アリストテレス理解の点でエルモラオ・バルバロの名を逸することはできないでしょう。何度もイタリアを訪れ、彼らと交わっています。イタリアで多くの年月を過ごした、ローマ教会の枢機卿ニコラウス・クザーヌスの著作には大いなる関心を抱き、その全集を編纂しました。1514年のことですが、私たちの時代にこれは再版されています。中世神秘主義に理解を示したことも付け加えていいでしょう。

文献学的批判にはやや曖昧な点があり、ルフェーヴル・デターブルを単にヒューマニストと称して良いかどうか疑問ですし、私はフィチーノやピーコもまたそのように評するのを避けてきました。哲学者は文献学主体のヒューマニストと異なる点が顕著だからです。従って、ルネサンス文化全体をヒューマニズムの名で括るのは間違いですし、フィチーノやピーコのような哲学者、ルフェーヴル・デターブルのような神学者は、中世スコラ学との関係を丁寧に見ておく必要があります。

そのような中で、そしてこのスコラ学的用語「第一質料 (マテリア・プリマ)」を特に問題にしている中で、ルフェーヴル・デターブルがクザーヌスの著書に加えた校訂には特に注目されて良いのではないのでしょうか。これはある意味で、ヒューマニズムと哲学文化に共通するルネサンス文化の特徴といえるもので、アリストテレスはアリストテレス自身の言葉で体系的に理解されるべきであり、後世の付加は除去されなくてはならないということでありました。クザーヌスの『神の直視』を校訂したとき、ルフェーヴルはアリストテレスの厳密な用語に立ち返り、スコラ的な「第一」を取り去ったのでした。

来日した二人の宣教師、ザビエルとフロイスの話に戻ってみましょう。ルネサンスの人であり、

ルフェーヴル・デターブルのパリで10年以上学んだザビエルであれば、大日を評するに「第一」を不要したのではないかと、考えたくになります。あとの世代である、パリで学んだことのないフロイスのほうに、スコラ的な古い用法が残っていたとも言えるかも知れません。神から眺めれば、大日は単なる質料に過ぎず、いかなる形相をも含まない純粋な質料の意味で「第一」を付加したことは、いかにもスコラらしい煩瑣性の名残とも言えましょう。

なおザビエルは1536年末にパリからイタリアへ出発し、インドに渡るべく40年春先にイベリア半島に至るまで、ヴェネツィア、ローマなどのイタリア半島主要都市で生活しました。このような経験もまたフロイスには欠けています。ちなみにザビエルの父はボローニャ大学出身です。このような背景ももちろんフロイスにはありません。私はもう少し、サビエルとイタリア・ルネサンスの関係、あるいはイタリア半島出身者のイエズス会関係者とこのルネサンスの繋がりが見えてこないかと思っています。

最後に、アリストテレス主義だけでなく、プラトニズム、プラトン主義と近世日本の思想との関係にも触れておきましょう。ここでいうプラトン主義というのは、靈魂不滅論と関わる思想としての哲学的伝統であります。これはイタリア・ルネサンスにおいて多くの議論が戦わされましたが、フィチーノの主著『プラトン神学』はこれを最も詳細に展開した、不滅論のスンマというべきものです。やはり来日した、ペドロ・ゴメスの『イエズス会日本コレジヨの講義要綱』には、1513年、第5回ラテラノ公会議で決定された教皇教書「アポストリキ・レギミニス」(Apostolici regiminis) 公布が反映しています。先の二人も靈魂不滅を日本で仏教徒に向い、強調しましたが、ゴメスはその公会議の名を出して、この真理を理解してもらう必要性を痛感しています。ゴメスにはアリストテレス思想が顕著に窺えるのですが、このようにプラトンの思想も時代を反映して現われています。

おわりに

アリストテレス主義であれ、プラトン主義であれ、それぞれのルネサンス的論題が16世紀の日本でも取り上げられているわけです。それ故に、このルネサンスは中世の他のルネサンスと違い、ヨーロッパだけの問題でなく、私たちに身近な文化思想運動と言いたいのです。他の、中世に繰り返されたルネサンスとは異なるのです。講演の題目を「ルネサンス世界—その意義と我々—」としたのも、このためです。

だが、アリストテレス主義も、プラトン主義も、イタリア・ルネサンスだけの思想領域にあるわけではなく、中世ヨーロッパを通じた思想の流れ、伝統です。この継続の理解なくして、15、6世紀における古代の思想的伝統を理解できるものではありません。そして古代からのこの伝統は、私がここでお話した以上の豊かな思想を持っていることは言うまでもありません。政治の領域を考えれば、すぐに分かることです。「ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所」は学際的な共同研究を謳われています。ヨーロッパ文化の究明のためにこの研究所が実りある発展を遂げられるよう祈念して、講演の結びの言葉と致します。ご清聴ありがとうございました。